

## 對佛教關係に於ける信長觀

吉田月仙

西曆	紀元	年號	摘要
一五七一	二三三一	元龜二年	辛未九月信長叡山を燒き僧徒を斬る
一五七四	二三三四	天正二年	甲戌九月伊勢長島一揆を屠る
一五七五	二三三五	天正三年	乙亥越前の一尙一揆を夷滅す
一五七六	二三三六	天正四年	丙子秋盛政をして加賀の一揆を撃たしむ
一五七七	二三三七	天正五年	丁丑三月紀伊の雜賀一揆を降す
一五七九	二三三九	天正七年	己卯五月安土に宗論をなさしむ
一五八〇	二三四〇	天正八年	庚申閏三月大坂本願寺尖佐竟に信長を和す
一五八一	二三四一	天正九年	辛巳十月高野山を攻む
一五八一	二三四一	天正九年	四月和泉の槇尾寺を燒打つ
一五八二	二三四二	天正十年	四月甲州惠林寺を燒打つ

## 第一、佛教壓迫の狀

日本史中、信長程佛教に對して壓迫主義を取つた者はあるまい。「嗚かぬなら殺してしまへほとぎす」云ふ句が明示して居る如く、信長は佛教に對しても徹底的に壓迫を加へた。その大體を以下表掲の順序に従つて少々記載を試みやふ。

### (A) 信長の叡山燒打

信長が元龜二年九月十二日叡山を燒打した事は、世人周知の事實である。而も其燒打たるや實に殘忍極まるものであつた。日本史を繕いても、斯く迄慘酷な殺戮を敢てした者あるを發見する事は出來まい。私は當時の慘狀を私の拙い筆で述べる代りに、織田家の祐筆太田一牛に依つて記された「信長公記」を引用したい。「九月十二日叡山を取詰、根本中堂三王廿一社を初奉り、靈佛、靈社、僧坊、經卷、不殘一字、時に如雲霞燒拂爲灰燼之地哀なれ。

山下の男女老若、右往左往に致廢忘、取物も不取敢、悉かちはだしにて、八王寺山へ迹上り、社内へ迹籠、諸卒四方より鬨音を上て攻上る。僧俗、兒童、智者、上人、一々に頸をきり、信長之懸、御目、是者於山頭、無其隱、高僧貴僧有智之僧と申し、其外美女、小童、不知其員、召捕召列、御前へ參り、惡僧之儀者不、及是非、是者被成御扶候へと聲々に雖申上候、中々無御許容、一々に頸を打落され、目も當られぬ有様也。數千之屍、算を亂し、哀成仕合也。年來之被散御胸臆訖。」【信長公記】「信長公記」は織田家の祐筆太田一牛が日記體に記したものにして充分信用してよいものである。惡僧共は是非に及ばず、雖も罪なき女小童迄も無慘に殺戮するに至つては最早彼は一個の厲鬼と云ふ外はない。斯くて根本中堂を初めとして、山王廿一社、鐘樓、經藏に至る迄文字通り「不殘一字」燒盡し、さしも繁榮を極めし叡山をして一朝

に狐狸の住家こなし、あまつさへ顯宗秘法聖教、帝都累代記録等の寶物書類を焼き永く後世の史家をして研究の材料なきを歎ぜしむるに至つた。

### (B) 信長の長島征伐

天正二年七月廿三日、信長は信忠卿と共に、數萬騎を引具して尾張國西方の長島を討果さんとして、遂に九月一揆を平けた。此時も信長の殘忍性は遺憾なく發揮され「潛に忍出んこする處を追付男女三千人計切捨、其耳鼻をそいで、城中へ船一艘に入れて送られける。」「大河を乗渡、鑓を入突崩し五百餘人切捨にこそしてけれ。」「弓鐵砲三千挺、提に添て伏置、目の下に見て、指詰引諸打せられし程に、一揆さも過半討れにけり。」「小瀬甫菴の筆になれる。」「信長記」は物語つて居る。

### (C) 信長越前の一向一揆を夷滅す

表にある通り信長は、天正三年に越前の一向一揆を夷滅して居る。當時の慘狀が如何なるものであつたか。例に依つて信長記を引用しやふ。

「一揆の郷民等親を捨て子を捨て、我いちましにこ山林へ逃げかくるゝを、十萬餘人の上勢追ひかけ押しつめ、爰の山かしこの籤原、岩のはさま木の蔭まで尋ね搜し、手にくゝ里民を搦捕つて刺し殺し切り殺す、……開袋の底をふるふ様に残らずさがし出されて、爰にては百二百彼こにては五十七高小手手に繩をかけ、……或は本陣へ引いて参り、或は當座に切り殺し、又はなぶり殺しにむしりちらし、或は生きながら首を引きぬかれ、其外驛所くゝのつまりくゝには五十七百二百つつ磔にあけ、鳶や鳥の餌食なる。」

かくして僅か十五日より十九日迄に討捕りたる一向坊主の首七百餘其外一揆の郷民の頭、都合一萬二千二百五十餘人な

りこは、餘りにも恐しき殺人鬼ではないか。

(D) 安土に宗論をなさしむ

日蓮宗に對する信長の態度を知るべき唯一の史料たる安土宗論は、天正七年五月廿七日、安土淨嚴院に於て行はれた。信長は時の判者因果居士に内意を含ましめ、理は日蓮宗にありしにも不關、遂に淨土宗側に勝を取らしめた。しかのみならず法華宗に對しては徹底的に懲罰を加へた。即ち其席にて袈裟を剥取るのみならず、宗論の強本人大脇傳介建部紹智の兩人を斬り猶普傳をも斬つた。而も信長の懲罰は此に止らず「法花衆は口之過たる者候。後日宗論負申たるこは定而申間敷候。宗門をかへ、淨土宗の弟子に成候敷、不然者、今度宗論負申上者、自今以後他宗を誹謗仕間敷の旨、墨付を出し候へど、上意の處に則御請申」【信長公記】こある如く謝まり證文を書く可く餘儀なくされた。

敬白起請文事

一、今度於江州淨嚴院、淨土宗與宗論仕、法花負申候事

一、向後對他宗一切不可致法難事

一、法花一分之儀可被立置之旨、忝奉存候事

右條々僞於有之者、忝可罷蒙日本國中大小神祇大乘妙典殊には三十番神之御罰者也、仍起請文如件、

天正七年五月廿七日

妙覺寺日諦(以下十二名)

又他の一通は、

今度當宗被立置之儀忝存候、就其向後對他宗法難之儀、聊以異儀不可有御座候、若猶自今以後、不屈之儀申出者、以此  
一行之旨、當宗悉可被成御成敗候、其時毛頭御恨不可申上候、此旨可預御披露候、  
恐々謹言、

五月廿七日

妙覺寺 日諦(以下一名)

以上二通の訛證文は、一は十三ヶ寺が血判署名して三人の奉行に宛て、他は三ヶ寺より差出したもので、何れにしても  
法花宗としては此上もない屈辱云はねばなるまい。

(E) 信長と本願寺

本願寺と信長は足掛十一ヶ年犬猿の間柄であつた。信長は永祿十一年、將軍義昭を奉じて上洛すると間もなく、軍用金  
及び將軍家の費用として五千貫文を本願寺より徴集し、又元龜元年正月には使者を以て、石山本願寺の移轉を要求した。  
斯くの如き難題に本願寺も堪わかね、顯如上人は檄を諸國の宗徒に發して、元龜元年九月十三日夜、遂に信長の軍に向つ  
て發砲した。かくて天正八年迄約十一ヶ年間信長は本願寺と争つたが結局本願寺は信長の敵でなかつた。信長の請要より  
勅命となり、表面和睦の形式を取つて天正八年四月九日、顯如上人は其夫人及年寄共と共に大阪を退去した。而して顯如  
の子、教如はその始め「誓紙の變改なされがたくば、御勝手次第、雜質へ退き給ふべし、我等は一寸も當寺を退くべから  
ず」(鷲林舊事記)と虚勢を張つたけれ共遂に籠城の不可なるを見て、天正八年八月二日未刻に大阪を退去した。これにて  
大阪も全く信長の掌中に歸する事になつた。

(F) 信長高野山を攻む

「信長公記」に、「八月十七日(天正九年)高野聖尋搜搦捕而數百人從<sub>二</sub>萬方<sub>一</sub>被<sub>二</sub>召寄<sub>一</sub>悉被<sub>二</sub>誅候<sub>一</sub>とある如く、諸國に徘徊する僧千三百八十三人を安土の町外れ、京都七條横、及び伊勢雲出川に於て殺した。しかのみならず、同年十月高野攻の命を下し、織田信孝を大將とし高野の七口を包圍した。爾來多少の小ぜり合をして居る中、本能寺の變突發して、空海の門未は幸にして一山燃打の厄運から免れる事を得た。

(G) 信長 惠林寺を焼く

信長は天正九年四月三日惠林寺を焼打つた。今當時の慘狀を左に織田軍記を引用して述べやう。

「僧徒老若等は皆山門の樓上に籠り居たるを、其下に燒草をつみ、火を掛け候ふ所に惠林寺の住持快川大通智勝國師を始め……其外平僧、兒、小僧等皆悉く燒殺され畢んぬ。……老若兒童の類は踊上り飛上り、互に抱付き悶々焦れ泣叫んで皆々燒死に候ひ畢んぬ。」斯くの如き焦熱地獄の中にあつて快川和尚は有名な一句「安禪未必須山水滅却心頭火自涼」を唱して端然化に入つた。

(H) 其 他

其外信長が佛教に加へた迫害としては、天正四年に佐久間盛政をして、加賀の一揆を撃たしめ、翌五年には紀伊の雜賀一揆を降し、天正九年には和泉の横尾寺を取圍み、堂塔、伽藍、寺庵、僧坊、經卷迄盡く燒拂つた。

以上略述した處に依つて、信長が如何に佛教を壓迫したか、又如何に殘忍な殺戮を敢てしたか云ふ事は、ほほ了解せられた事と思ふ。

## 第二、壓迫の理由

何故に信長は、以上略記した程迄に、佛教を壓迫しなければならなかつたのであるか。それを知る爲には、其理由を一見する必要がある。私は其勞を惜む事なく左に記載致そう。

### (A) 叡山燒打の理由

信盛、肥後入道の兩人が叡山燒亡を諫止した時に信長は答へて曰く、「心を閑めて承候へ。此寺吾亡すに非ず。自業得果の儀あり。抑我一日片時も不<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>枕於泰山之安<sub>一</sub>、輕<sub>二</sub>一命<sub>一</sub>、盡<sub>二</sub>粉骨<sub>一</sub>、私欲を去り、士の勞に代、偏四海の逆浪を治め、王道の衰たるを興し移<sub>レ</sub>風易<sub>レ</sub>俗、再政教を無窮に垂れん<sub>二</sub>欲する者なり。然るに去年攝津國野田福島を取詰、既落城に及處、朝食、淺井其隙を窺ひ、數萬騎にて當國志賀郡へ差出間、從<sub>二</sub>彼地<sub>一</sub>引返し坂本口を追拂、翌日彼賊徒等、つほ笠山へ追上、其後深雪こしちの路をふり埋み、通ひも更に有まじき折なれば、悉討果すべかりしを、山門の衆徒企<sub>二</sub>逆意<sub>一</sub>之條、汝等遺し轉々言を盡し理を究めたりしかども、其儀に不<sub>レ</sub>應の間、重て稻葉を相添遺して、實無<sub>二</sub>同心<sub>一</sub>ば必根本中堂山王の社を初とし、一字も不<sub>レ</sub>殘燒拂、僧徒悉可<sub>レ</sub>刎<sub>二</sub>頸旨申しかども、終に同心なかつし。是信長を欺に非、天下政道の護持を妨者也。兇徒を助るは國賊也。其上此度亡さずんば又天下の殃たるべし。一人も不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>助<sub>二</sub>理を盡して被<sub>レ</sub>仰ければ、夕庵入道も其理にや服しけん、一言の返答もなかりける」云信長記に記してある。

### (B) 長島征伐の理由

「尾張國西方長島の兇徒等、根を絶葉を枯す様に討果し、林新三郎が教養にせん<sub>二</sub>て………抑此長島には一向宗修行の僧徒桶籠たりけるが、所は四方節所にて、二三里の間大河三重四重引廻しければ地の利に自慢して、鐵の桶<sub>二</sub>心得<sub>一</sub>、近國の徒者<sub>二</sub>も相集山賊海賊等を業<sub>一</sub>し、征伐の妨をなし、聊の利を見ては、是非を顧る能ず。逆威につのり、王政をも不<sub>レ</sub>恐の

間、旁攻伐んて、手を分四四より堆入給ふ」と信長記に記してある。

### (C) 越前の一揆夷滅の理由

「越前の國一揆の事去年發向よりこのかた次第く蜂起し、後には一向宗の大坊主きもと土民等不和になり又合戦に及ぶ、一國散亂して諸村騒動す……信長の軍勢押し寄するや「常々活計めされ、女犯肉食に飽きみちて世に腥坊主なき名に立つる人々こそ信長とも合戦をめさるべけれ、我等へ下知は無用なり」云織田軍記に記してある處に依つて其夷滅の理由は明了である。殊に味方の者より女犯肉食に飽きみちて云々云はれるに至つては墮落の狀も蓋し思ひ半ばに過ぐるものがある。

### (D) 安土に宗論をなさしめた理由

「信長記」の記す處に依れば信長公は「我夷末隱並普請も半なるに加様の舉動甚以不可然。好事も無きにはしかじ。忽ぎ無事を調へよ」として調程された處、淨土宗の方は如何様にも御仰の通りに從順に出たけれ共、日蓮宗の方は更に聞入れず却つて遮る事斜ならずであつた故信長は「國家諸事勞しき折なるに依つて無爲の儀取扱ふ上は沙門の身にして豈忍辱の心を不存ん哉。嗚呼無道至極せり。國家をうれふる事は夢にも不知して信屈聲牙にして謂他法<sub>二</sub>街<sub>二</sub>自法<sub>二</sub>是偏に天魔被旬の業なりとて氣惡あしかつた」云ある。

### (E) 信長本願寺と争ふ理由

信長が石山に眼を着けたのは恐らく永祿四年上國觀光の時からであらう。蓋し大阪の地は彼の西國經營の咽喉地であるからである。太田一牛は信長公記の中に大阪城に關する記事を左の如く記して居る。「抑大阪は凡日本一之境地也。其子細

は奈良、境(堺)、京都程近く、殊更淀、鳥羽より大阪城戸口まで船の通ひ直にして四方に節所を抱、北は加茂川、白川、桂川、淀、宇治川之大河の流、幾重共なく二里三里之内、中津川、吹田川、江口川、神崎川、引廻し、東南者上ヶ嵩、立田山、生駒山、飯盛山之遠山の景色を見送、麓は道明寺川、大和川之流に新ひらき淵、立田の谷水流合、大阪の腰まで三里四里の間、江戸川とつゞいて、渺々ミ引まはし、西は滄海漫々ミして、日本之地者不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申、唐土、高麗、南蠻之舟、海上に出入、五畿七道集之寶賈利潤富貴之湊也。」かくの如き地に信長が眼を著けたるは寧ろ當然である。信長に取つて要望の地であると齊しく本願寺に取つても又要望の地である。従つて信長の移轉要求に對して本願寺が承諾を與へなかつたのも滿更無理でもない。而も天下一統の望を有する信長に取つては抗する者は盡く憎むべき敵である。加ふるに本願寺は毛利氏ミ結び、信長の裏を掻き九月十三日の夜、信長の軍に向つて發砲した程であつた。かくして信長ミ本願寺とは十一年間葛藤を續けたのである。

#### (F) 高野山を攻むる理由

高野山の僧共も戰國の餘習に従つて兵を蓄へ、大和國宇智郡の坂部、二見に要害を構へたので、信長は天正元年速かに其岩を破壊すべき事を高野山に命じたけれ共、山徒は其命を奉じなかつた。又天正五年根來攻の時に信長より其應援を申込んだけれ共、野山は應じなかつた。此等は信長の野山攻撃の間接理由である。其直接理由は天正七年十月、伊丹城を脱したる荒木村重の家臣五人が八年三月に高野山の西院谷、池ノ坊に身を隠した。これを聞いた信長は同年七月、前田利家、不破河内守をして之を搦め取らしめんミした處、山徒は五人の者は既に逢電したミ兩人を欺き歸へした。越けて八月七日堺奉行松井友閑は步卒卅二人を逮捕の爲めに登山せしめた處、山徒は卅二人を酔飽せしめて悉く之を虐殺した。此報

を耳にした信長は其報復として高野山を攻むる事となつたのである。

### (G) 惠林寺を焼く理由

「今度御敵徒甲州に隠れたる佐々木承禎、此比は名を隠して佐々木次郎云ふ。其外前公方義昭の上使、上福院、大和淡路守、此三人惠林寺に隠し置くに付いて三位の中將殿聞し召し及ばれ、此三人先年公方武田信玄内通の使を仕たる事、具に御尋ねなされたき事ども、これあり候間、出し候への由、三箇度まで御使を立てられ候へ共、たとへ一寺滅亡に及び候ふも三人の者をば出し申すまじ申し、潜に三人を遂電いたさせ候。中將殿御立腹にて御仕置には替へがたく候間、寺中を搜し、其上にて破滅仕るべき由仰付けられ」三織田軍記二に記されて居る。

### (H) 其他の征伐の理由

其他加賀の一揆を撃つたのも紀伊の雜賀一揆を降したのも、和泉の横尾寺を焼いたのも、ほほ上述と同様の理由で彼等が多数蜂起して逆威を振ふたり、寺領の檢地を拒んだりしたが爲めであつた。

以上列擧したる理由より考察し、其壓迫の理由を歸納する時は主として次の四つの理由に歸する事が出来ると思ふ。

- 一、信長が天下統一の希望を抱いて居つた事。
- 一、當時の僧が信長の命を奉じなかつた事。
- 一、當時の僧が墮落して居つた事。
- 一、信長の性格が殘忍であつた事。

私の見る處では、此四つの理由が信長をして斯く迄に佛教に壓迫を加へたものであると思ふ。當時は所謂戰國時代であ

つた、武田、上杉、北條、今川、大内、島津、毛利等の群雄四方に割據し何れも中原の鹿を追ふに汲々たる時代であつた。信長も此等群雄の間にあつて早くより天下一統の志を抱いて居つた。従つて彼の統一事業に對して妨害をなす者は、それが僧侶であるに否に不關、憎むべき敵であつた。而も僧侶自身にあつても、かゝる時勢の影響を受けて自護の必要上、信長に抗せねばならなかつた。これは僧侶自身の方よりしては極めて當然であるけれ共信長に對つては憎き敵であつた。適、當時の僧侶が道德的に墮落して居つた事は、彼等征伐の好き口實を信長に與へた。當時の僧侶が如何に墮落して居つたかは、上述の征伐理由の中に明了であるが、私は一層明了にそれを證するの一助として左に、フランソア・サビエル書翰の一節を記載致そふ。

「此國にては僧侶の事をボンズミ云へり。彼等は大に俗人ニ異り、至つて不品行にして、不斷に悖德亂倫の行爲あれども普通の人は毫も之を咎めざるのみならず、却て彼等を尊敬しつゝあれば、ボンズ等は人間社會に最も嫌忌すべき獸慾を逞うして、憚ることなく、墮つて其信徒の中にも彼等の惡風に倣ふ者亦往々にしてこれあり。我等が此獸行を戒めたるまきに、普通の信徒なれば、直に悔悟改悛するも、ボンズ輩は然らず、すべての訓誡も之を馬耳東風と聞き流し、冷笑罵言を以て之を迎ふるのみ。彼等は口に殊勝らしき宗義教法を唱導するも、實際は日本國中最も不道德なる者の團體なり。(一五四九年、天文十八年、フランソア・サビエル書翰の一部)

天文十八年は即ち信長十六才の時である。サビエルは天文十八年八月十五日に鹿児島に入港したもので、入港後、日猶淺きが故に此書翰を其儘信する事は、些か妥當を缺くかも知れないが然し當らずに雖、遠からざる底のものである事は、上述の征伐理由より押ししても、斷言する事が出来る。

斯く事情を極めて來れば、信長が佛教に對して壓迫を加へたのは極めて當然であつて、秀吉、家康を信長の地位に置けば、恐らく信長同様に振舞ふた事であらふ。只信長の場合に於ては、彼の性格が「鳴かぬなら殺してしまへばこゝろざす」の俗諺にもある通り、人一倍の疍癩持ちであり、残忍性の權化であつたが爲、佛教に對して極端な宛も宿怨あるが如き態度を以て臨んだに過ぎない。

## 第二、結 論

上述の征伐理由よりして、私は信長があれ程佛教を迫害したにも不關、信長は決して其教理主義上より寺院僧侶を壓迫したのでない。斷言するに、何んの躊躇も感じない。素より彼は熱烈なる佛教信者ではなかつたかも知れない。併し他面より考察するに、彼にも又佛教信者の面影があり僧侶も親密な交際があつた様に思惟される。それを積局的に證據立てるものは、政秀寺の建立であり、澤彦始め其他二三の禪僧との關係である。それ故私は以下その事に就て少し記述を試みなければならぬ。

「信長卿は御幼少より行跡我意にして、先考へも不孝に候事を起居に政秀盡三至諫三申せしは、先祖先孝へ不孝に候事五常をしろしめされず候。古人の語にも孝子哀三亡三如三哀三存三こそは申をかる彌。御棧隨に候ては武家の御冥加も盡き候はんか一度は國家をも治め給はんを見申度存知そて乳哺より守て立て候へども、御棧隨に候て悪く成らせ給ふ受彌頼母敷けもなく君臣の間も不和に成り行き候へば……」三「尾張政秀寺記にある通り、信長は幼時より人も知る極めて粗暴の人であつた。政秀も諫書を捧けて再三諫言するに雖、更に改まる氣色も見ぬ故、遂に死を以て諫止せんと欲して、天文廿二年丑閏正月十三日の曉、志賀村の自宅に於て自害したのである。自分の父信秀の死に遭遇しても、更に悲歎の色を見せな

かつた彼れ信長も、此報を耳にするや急遽、裸馬にて駆付け、「此上は養生尤なりて亦脇指に御取付き候へ共不叶……信長御死骸に御抱きつき候て御愁嘆の支無限（政秀寺記）迄歎き悲んだ。斯くて彼は政秀の菩提を弔はんとして、天文廿二年小牧山の南の小木村（今西春日井郡北里村大字小木）に一寺を建立し、政秀寺と號し寺領三百貫を寄附し、妙心寺の僧、澤彦を開山としたのである。若し信長が佛教の教理主義上よりして、佛教僧侶を嫌厭して居つたならば決して此舉はあり得ない筈である。それ故此舉は彼が又一個の佛教信者である事を物語るものである。嘗に一字を建立したのみでなく彼の私淑した僧も決して一二ではない。其中でも殊に澤彦は、極めて親密の間柄で丁度足利尊氏も夢窓國師のそれに似て居る。今「政秀寺記」に依れば、「信長」の名を選んだのも、「政秀寺」を號する事を許したのも澤彦であつた。又信長が美濃國を取つた時、政秀が世にある時、井ノ口は城の名に惡しと云つたのを思ひ出し、澤彦に改名を請ふた處、澤彦は「文王起岐山一定天下」と云ふ古語より岐阜を名附くべしと答へて、額の名盆に黄金十板を貰ふて居る。又朱印の字を依頼され「布武天下」の四字を選んで、其慰勞として信長は、澤彦の爲に能會を催した。其時信長は彼に皮踏鼻を與へた處、足大きく違ふして著け兼ねたのを見て、信長は「我はかせ申さんとて御手傳被成候て被著たり」と云ふ事である。これは丁度尊氏が夢窓國師の手傳洗手水をかけたのミ好一對で、あれ程迄に僧侶を壓迫した信長も同一の人とは思はれない位である。此外「政秀寺記」には兩人の親密な交際が明細に示されて居つて、遂には檀那になる約束、岐阜に一寺を建立する約束迄して居る。只單に「政秀寺記」のみを通して信長を見るならば、彼も又一個の熱烈なる佛教信者の如く見える。

信長は澤彦和尚の外に、策彦和尚や商化和和尚も交際がある。

「其比天龍寺に妙智院策彦和尚とて碩學多才の活僧あり。殊に大明再渡和漢兩朝の達人なる由舉世云あへりければ信長公

より安土山の記を御所望有ける。去ども被<sub>レ</sub>固辭幸濃洲岐下に南化和尙<sub>ニ</sub>て名僧御望ます。即此僧に被<sub>レ</sub>仰付可<sub>レ</sub>然候はん<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>申しかば頼<sub>テ</sub>其旨御説あり。此人も亦策彦和尙へ被<sub>レ</sub>命宜く可<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>互に辭し合れしか<sub>ニ</sub>も仰敷波なれば無<sub>レ</sub>所辭即染<sub>レ</sub>筆了。」(信長記)

斯くて天下の名文「安土山記」は南化和尙に依つて作られた、其時、信長は南化和尙へ黄金百兩、小袖三重を下して其勞功を慰め、又策彦和尙へは其謙徳の美を賞して金子百兩、銀子百兩、小袖三重を下した。信長が「安土山記」の作者南化和尙へよりも、謙讓した策彦和尙へ反つて二倍の金子を下した處に信長の性格が、よく現はれて居ると思ふ。若し叡山や本願寺其他の僧にして策彦和尙程の謙讓の徳があつたならば、あれ程迄極端な處置は取らなかつたであらうと思像する。

「五山詩僧傳」に依るに信長は、策彦和尙<sub>ニ</sub>屢會見して支那に關する知識を取得した。又信長が彼を妙智院に訪ふて偶ま彼の寢室に這入つて、架上衲衣、紙衣各一領のみ室内他の長物なく、只函櫃一個のみあるを見て、其枯淡の生活に感じ肥田若干を寄附した<sub>ニ</sub>云ふ事である。

かの安土問答の判者として選ばれた人は南禪寺の所謂秀長老即鐵叟景秀であつた。

此等の史實より考ふる時は、眞に僧侶らしき僧侶に對しては信長も、決して彼の横車を引かなかつた。否寧ろ尊崇し好遇して居つたのである。

上述の見方からして、私は佛教壓迫者としての從來の信長觀を些か變更しなければならぬと思ふ。素より彼は確かに日本史上唯一の佛教壓迫者であつた。而も彼をして斯くならしめたものは、上掲した四個の理由からであつた。若し當時に於て、信長が天下統一の望を抱いて居らなかつたならば、若し一般僧侶が彼に抗せず、而も道德的に高潔であつたならば

若し彼の性格が今少し寛厚であつたならば、恐らく信長と佛教竝に僧侶との關係は、決して上述の如き犬猿の間柄ではなかつたであらう。而も當時の事情として僧侶が兵馬の權に頼り、信長の命に従順であり得なかつたのも決して無理からぬ事として、承認しなければならぬ状態であつた。併し天下一統の望を抱いて蹶起する者に取つては、抗する寺院僧侶は憎き敵であらねばならぬ。それ故に、私は信長が佛教を迫害したのは、佛教の主義主張を理解して、即ち其教義上より迫害したのではなく、飽迄も天下一統の政策上よりして迫害したに過ぎないと思惟する。従つて政策より切り離して信長對佛教の關係を見る時は、寧ろ政秀寺竝に澤彦其他の禪僧との關係に於て眞の信長を見出すべきであると思ふ。